

■□ 解題

地域再生と協同

上掛 利博（本研究所研究委員会委員長 京都府立大学教授）



イギリスのEU離脱が、昨日からニュースになっています。ノルウェーは、1995年にEU加盟の国民投票を行いました。「加盟しない」という結論を出して21年経ちましたが、世界で最も福祉が発展し、女性の地位も高く、1クローネの赤字もないということで、経済と福祉が両立して発展していることを証明した国でもあります。

ノルウェーに住んでいたとき、町のすぐ近くに森や湖があり、人びとは土曜や日曜になると、よく自然の中に出かけていました。土日に町に出て買い物をするという習慣がないのです。自然のなかでリフレッシュして帰ってくるという暮らし方と人々の意識とが、どのように関係しているのだろうと常々思ってきましたが、昨年、「アラヤシキの住人たち」という映画を観ました。北アルプスの山裾にある長野県小谷村の生活のドキュメントで、アラヤシキ（新屋敷）の住人たちが、ヤギにえさをやり、畑で野菜を育て、かまどに薪をくべてご飯を炊き、生きることの根源的な意味を考え合う「共に働く学び舎」として創立された「共働学舎」の取り組みを描いた作品です。

この映画には、生きづらさを抱えた人たちもいるし、そうでない人たちもいて、誰もが固有に持っているそれぞれの能力を尊重し合って、ひとつ屋根の下で、春・夏・秋・冬の生活を過ごす様子が出てきます。その営みは、誰にもある「生きものとしての人

間の時間」を考えさせるようなものでしたが、映画のパンフレットに内山節さんが「生きる世界のなかに暮らしがある。暮らしのなかに生きる世界がある」という時間と空間を描いており、「個人の生きる世界は、絶えず、“みんな”の世界と結ばれている」と書いておられます。それは「何事もない世界である。春には春の暮らしがあり、夏には夏の、秋には秋の、冬には冬の暮らしがあるだけの世界」である。「何ごともない」というと、マイナスのイメージを抱く人もいるかもしれないが、それは事が起きないという意味で「無事」ということであり、その反対語は「有事」である。かつて人々は、何よりも無事を喜び、自然の無事を、ともにある世界の無事を、それぞれの無事を祈ってきた。近代以降の時代が、「何事もない」暮らしを停滞とみなし、人間たちを有事のなかに引きずり込んだだけである。その結果、人間たちは発展や成長を求めて自然から離れ、競争や「自己実現」などという下品な言葉のなかに引き込まれていった。だが、そこで人間たちが手にしたものは、不安といらだち、無事な暮らしの喪失だった、と。

内山さんの記念講演のなかでも、ローカリズムについて、あるいは伝統に回帰することの新鮮さについて、あるいは地域にあるいろいろな問題を解決するための「テーマによってつくられている小さなコミュニ

ティ」が集積されることによって地域の関係性が成り立っていて、そういう網の目が地域をつくっているのだ、ということを示していただきました。

わたくしは、京都府生活協同組合連合会の広報誌（『京都の生協』2016年1月）で、ゴリラの研究で知られる京都大学の山極壽一総長と対談をしました。山極総長は、「ゴリラは、体格の大きなものや年長者が幼児やからだの弱い者に食べものを分配する生き物で、サルとはそこが違う。その食べものを人間は仲間と分け合うことで、いろいろな感情を共有し、信頼関係を築いている。このゴリラと人間の持っている人類史的なよさは、人間がサルに近づくにつれて消えつつある」とおっしゃいました。

人間社会が「サル化」するとはどういうことかとお聞きしますと、「昔は、電車でお年寄りや妊産婦やからだの不自由な方を見かけたら席を譲るのが当たり前だったけれども、いまは『優先席があるのだから、そっちに行けばいい』というような風潮が広がっている。つまり、ルールが最優先で、相手の事情や能力を汲み取って、相手のために何かをしたいという気持ちがなくなっているのではないか」という「ルール化する社会」のこととされました。

さらに、人間が人間であるということの大切な部分に「家族」があって、「家族は、自分のために相手がいるとは思わない。相手のためには無償で動く。そういう関係性がある。一緒に食べたり遊んだりするうちに信頼関係をつくり、そういう信頼関係が人間の社会をつくってきた。つまり、食事や遊びは非生産的・非効率的でむだなことに見えるけれども、共感能力を養ううえではとても大事」とおっしゃいました。

共感能力がなければ、信頼関係はつukれない。ところがサル化してしまうと、ルー

ルさえ守ればあとは利益重視だから、効率を最優先する。そうすると、人びとは「個人の利益を高めるために仲間や社会やコミュニティがある」と誤解し始めて、自分の利益を高めてくれない者を敵として集団から追い出し、どんどん閉鎖的な集団になってしまう。だから、ゴリラや人間のよさ、あるいは人類の歴史から見た類的存在といった本性にもう一度立ち返ってみる必要があるのではないか、というお話でした。

神野直彦『「人間国家」への改革～参加保障型の福祉社会をつくる』（NHKブックス、2015年）に、スウェーデン社会では民主主義を守るために学習サークルの運動が非常に活発であると紹介されています。神野さんは、「スウェーデンのおとなの2人に1人は、なんらかの学習サークルに属していて、仕事を終えてから、お酒を飲まずに読書会に集まって、自由な個人が自由な討論をする。19世紀後半の大不況で深刻な社会問題が生じたとき、スウェーデンでは学習サークルが運動として広まって、民主主義を守ってきた。教養を武器にした民主主義を推進する運動がスウェーデン社会のバックグラウンドにあって、今日の福祉社会を形成している」ということで、「人間国家」への展望を示されました。

最近、テツオ・ナジタ『相互扶助の経済』（みすず書房）を院生と一緒に読んでいます。ハワイ生まれの二世ナジタさんは、シカゴ大学名誉教授で歴史家ですが、「人間と地域社会の生活を維持するために助け合う人々の実践」を書いています。「民衆は、知の第一原理としての自然を前提にして、地域の生活を維持するために行動しているのであって、政治的命令を必要条件として行動してはいない。この歴史が、現在の地域に根づいた市民運動と密接に結びつき、自然環境に呼応してこれを守り、“道徳的

な経済”という人間らしい原則を促す」というのです。この本では、大阪の懷徳堂を紹介しています。それによると、大坂商人たちは、毎月8日に集まって「読書会」をやっていました。当時のいろんな人たちが書いたものを読書会で学び、そのなかの大事なポイントを自分たちで冊子として発行し普及していました。脇坂義堂という人の話を引用して、「すべての人には、自分をひとかどの人物にするだけの潜在的な力がある」という言葉を紹介しています。今日のアマルティア・センの考え方にも通じるものです。福祉においては、その人の持っている潜在能力を引き出し、生きる意欲を引き出すことが最も重要です。

この本では、「生活という場で人間らしく生きること」すなわち「人生を楽しむ方法」を考えていくうえで、「学習をすることが基本にないといけないのではないか。だから、「商人は、儉約ではなく、知性と度胸を重んじるべき」で、タイミングを失わないで物を交流させることで発展してきたというくだりを読んだとき、江戸時代の考え方のなかにもヨーロッパで展開されたのと同じような考えが眠っているのだということに気づかされました。

＊

『くらしと協同』（2016年春号）に、現代公益学会編『東日本大震災後の協同組合と公益の課題』の書評を書きました。福井県立大学の北川太一さんが「組合員のみならず地域住民も含めた公の利益（地域の利益）を実現することが協同組合の使命である」と問題提起をされ、「今日、絆、つながり、コミュニティという言葉に光が当たっているのは「協同」の大切さであって、協同組合では必ずしもない」、「協同組合の関係者が地域を見なくなり、組織の内側からのみの視点で事業や経営を考えてい

る点、言い換えれば、協同組合の組織や事業を単一のモノサイで評価しようとする姿勢が顕著になり、法制度もそのことを強く求め、それに応えようとする傾向が増大している」という指摘をされています。

関西大学の杉本貴志さんも、農協、生協、漁協、森林組合、信用組合など、組合員の種別に分かれた単一の利益を追求する協同組合だけではなく、社会的協同組合、コミュニティ協同組合という多種多様な組合員から構成される協同組合をめざす、マルチ・ステークホルダー論が理解されるようになってきたとし、協同組合という非営利・協同の事業体は、「社会全体をよりよいものに変えていく運動体」でもあり、そこが株主の利益向上という一点だけを追求すれば事が足りる株式会社とは異なることを強調されています。

このように、協同組合が社会のなかでどのような役割を果たすのか、という点が問われているとして、今回のシンポジウムでは、「生きがいは、誰かの役に立っているという実感など、他の人とのつながりや支え合いがあってこそ得られる」、「生活困窮者への支援では、その人にとって何が必要かではなく、誰が必要かを考えなければいけない」ことに注目しました。格差を拡大させ続けている安倍首相の「地域・地方創生」とは異なる対抗軸として、「地域再生と協同」という立脚点に立って、暮らしの側から地域がどのような状態にあるかを明らかにし、若い人の動向も含めて、どういうアクションが求められているのか、あるいは「地域住民」が主語になって、協同組合の仕組みや組織、人材を使って新たにつくりあげるコミュニティ（居場所や関係性）はどういうものであるか、ということについて多様な観点や発想から考えてみたいということで、全体を構成しました。